ポンディシェリのまちづくり

高須　奈緒美

目次

【ポンディシェリというまち】 4

【アジットさん】 5

【タミル地区の町家】 6

【グランバザール】 10

【グリーン・ダイヤモンド】 11

【夜に歌う】 14

【ツナミカ：津波の子】 15

【旅のおわりに】 16

（追記） 17

インドには夏しかないけれど、ものすごく暑い夏、ちょっぴり暑い夏、ふつうに暑い夏がある、そのあえかな違いが深遠なるゼロの哲学を生み出す源となった、というようなことを書いた哲学者がいたが、2005年12月のデリーはそんな哲学的思索にふける余裕もないくらい、おそろしく寒かった。ホテルの部屋にはちいさな電熱式のヒーターがひとつおいてあるだけ。ベッドで毛布にくるまり、ちぢこまっていても身体がちっとも暖まらない。部屋じゅうウロウロしたあげく、ようやくエアコンのスイッチを見つけてひねったとたん、ブオオオォっというものすごい音とともにかび臭い風が吹き出した。臭いだけで一向に暖かくなる気配はなく、あまりのうるささに閉口してスイッチを切った。

寒さに震える一夜を過ごし、デリーからムンバイ経由でチェンナイに飛んだ。南に向かう人々は、こころなしか穏やかで、のんびりとしていくように見える。マドラス空港に降り立つと、暖かく湿った南の風が身体をふわりと包みこみ、ヤシの濃い緑のヤシの木々が目に飛び込んできた。汗ばむ暑さが心地よく、予約しておいたタクシーに乗り込んでほっと一息。よぉし、ゼロの哲学でも微分積分でも何でも持って来いと、のびやかに気が大きくなった。ここからポンディシェリまで、3時間あまりの道のり。道の両側には亜熱帯の豊かな緑の田園風景がひろがり、牛たちがのんびりと草を食んでいた。

小1時間走ってちょっとのどが渇いてきたところで車がとまった。道ばたに、赤ん坊の頭ほどのココヤシの実を山のようにつみ上げて、小さな男の子が立っている。ひとつちょうだい、というと、ナタで器用にヤシの頭の部分を六角形にそぎ落とし、とがった刃先をそのてっぺんに突き刺した。グイっと持ち上げて三角形の穴をあけ、ストローをさして出来上がり。青臭くて、かすかに甘味のある汁がのどをするする下りてゆき、からだじゅうの細胞にしみわたっていった。

8歳だという男の子に学校は行っていないの、ときくと、今はクリスマス休暇だから授業はないんだ、「サイドビジネス、サイドビジネス」と真っ白な歯を見せて笑った。8キロ離れた村から毎朝てくてく歩いてやってきて、ヤシの実を集めて売っているという。運転手さんが、えらいんだな坊やは、勉強頑張れよ、と持っていたボールペンを進呈した。男の子は嬉しそうに受け取って、そのボールペンで私たちに自分の住所と名前を書いてくれた。

2004年12月のインド洋大津波は、チェンナイからポンディシェリに至るタミル・ナドゥ州沿岸地域にも、その深い爪痕を残していた。真っ青なインド洋に沿って走っていくと、海のすぐ近くにワラ葺きの小さな被災者住宅が、ひしめき合って建っている。ああ、あの津波からちょうど一年が経つのだと、改めて思った。このあたりは海岸沿いに、たくさん家があったけれど、津波でみんな流されてしまったと、運転手さんが話してくれた。漁業で生計を立てていた人々の多くは家族を失い、船を失い、家を失い、ふたたび津波が来るのではないか、これからどのように生活していこうかと、不安をかかえて生活しているという。海岸から数百メートルしか離れていない粗末な被災者住宅で、いまも身を寄せ合って暮らす家族を思うと、青く静かな海の色がやるせなく感じられた。

【ポンディシェリというまち】

ポンディシェリはタミル・ナドゥ州の南東、インド洋に面した南北1200m・東西1800mの楕円形のちいさな都市である。17世紀までは漁民と職工の集落が点在するひなびた村だったが、ヨーロッパ諸国のインド進出とともにポルトガル人、オランダ人、フランス人などが次々と訪れ、布を買い付けたり工場を作ったりするようになった。1693年からはオランダ、英国、フランスが入れ替わり立ち代わり植民地支配を行い、それが1954年のインド独立まで続く。オランダによる統治は1693年から7年間のみ。その後はフランスが4回、英国が3回。なかでもフランスは、17世紀後半からの入植開始以来、250年近くにわたってこのまちとの関わりを持ちつづけた。いまもポンディシェリは、「インドで唯一のフランスの旧植民地」として知られる。

ポンディシェリのかつての町並みは、英国が最初の植民地支配を行った1761年から1765年の間に、すっかり破壊されてしまった。その後1765年から1778年にかけてフランスが2回目の植民地支配を行った際、町の再生にとりくんで現在の町並みが形成された。運河をはさんで南半分がフランス地区、北半分がタミル地区。それぞれが特徴ある景観を形作っており、まちの顔つきも雰囲気も全然ちがう。インド洋に面したフランス地区は、大きな邸宅やホテルが点在する閑静な住宅街。これに対し、タミル地区は木造の伝統的な町家が軒を接してひしめきあう、喧騒と活気あふれる下町である。

フランス地区はキリスト教徒が多く、大きなカトリック教会がある。その近くには、インドの独立運動に携わりその思想的支柱のひとりともなった革命詩人、シュリ・オロヴィンドのアシュラム。アシュラムの中はしんと静まりかえり、いまもなお、たくさんの人が花をささげ、じっと瞑想している。オロヴィンドは、20世紀の初めに英国からインドに戻ってきたが、爆弾テロの容疑をかけられ、一時期ポンディシェリのフランス地区に身を隠していた。彼が提唱した自己啓発コミュニティ「アシュラム」は、白・青・灰色に塗られた特徴ある建物で、フランス地区のあちこちに点在している。日常生活を営みつつ、労働や教育活動を通じた自己の発見と開発をめざすその思想は、多くの人々の支持を得た。フランス地区の一角にある「ゴルコンド」は、20世紀前半にアントナン・レイモンが設計したアシュラムの総本山ともいうべき瞑想場で、近代コンクリート建築の傑作としても知られている。

タミル地区にもアシュラムは数多く存在する。だがこちらは、ヒンズー教、ジャイナ教、イスラ

ム教などの寺院が立ち並ぶ中に、混在している形だ。フランス地区の静けさとは打って変わっり、まちには人々が、牛が、三輪タクシーと人力車が、自動車と入り交じりすれ違い、ゴムのラッパのクラクションが鳴り響き、終日あふれかえるような活気を見せている。まちの胃袋ともいうべき巨大な市場、「グラン・バザール」があるのもこの地域である。ポンディシェリは、ちいさな楕円のなかに、たくさんの人のさまざまな営みが一緒にぎゅっと詰まった、文字通り多文化共生のまちである。

車は海沿いを走り続け、ポンディシェリのまちなかに入った。コロニアル風の瀟洒な邸宅の立ち並ぶフランス地区の一角に、今夜の宿泊先であるホテル・プロムナードはあった。見渡す限り海が広がり、海岸通りを色とりどりのサリーをまとった家族連れがぞろぞろ歩いている。この時期は、インド各地から休暇で訪れる人が多いのだとホテルの支配人は言った。目の前のインド洋には、大きな夕日を背に、その日の漁を終えた小船がぽつりと浮かんでいた。

【アジットさん】

アジットさんは、アシスタントのリシーさんと一緒にホテルのロビーで待っていた。ゆったりしたインドの伝統的な衣装に身を包み、大きな茶色の目と緑がかった銀色の髪とヒゲが、ヨガの行者を思わせる。人なつこい笑顔と高らかで屈託ない笑い声は、いつも周りをなごませ、人の心を捉えて離さない。

デリー大学で建築を学んだアジットさんは、200年前に建てられたフランス地区の邸宅を改修し、「オリエンタル・ホテル」というホテルに再生したことで知られる。この邸宅は、これまで幾度か人手にわたり、壁や天井を塗りかえたり、間取りを変えたり、さまざまに手を加えられてきたが、アジットさんはそうした部分を注意深く、全部剥がしてしまった。200年前の姿に戻そう

と、創建当初の素材と伝統工法を調査し、大変な苦労の末に復元した。伝統建築の粋をすみずみまで甦らせたそのホテルは、2000年ユネスコ・アジア太平洋賞を受賞している。女中部屋あり、フトン部屋あり、広々とした主人の寝室ありで、各部屋は、大きさもしつらえもことごとく違っているのだが、それをそのままひとつずつ客室に仕立て、200年前の家の記憶の中に私たちを迷い込ませてくれる。オリエンタル・ホテルに泊まってもらいたかったんだけど、あいにく満室でね、まあ、このホテル・プロムナードもいいところだけどさ、とアジットさんはちょっぴり残念そうだった。

アジットさんは1948年生まれ。建築家としてたくさんの建物を設計しているが、とりわけ住宅建築を得意とする。ひとつひとつの住宅の個性をじっくり考えたプロジェクトを数多く手がけ、天井ひとつ、柱ひとつもないがしろにしないこだわり屋。もちろん自分の家も自分でつくった。この地方の伝統的な工法を応用し、日干しレンガを積み重ねた上にしっくいを塗った。天井も日干しレンガを積んだ上にスレートを置いた。風通しのよいさわやかな家である。夕方になると屋上に出て、クジャクが飛んでくるのを奥さんとゆっくり眺めるのがいちばんのたのしみだという。

ポンディシェリの隣に、オーロヴィルという共同体がある。「だれにも属さない新しい都市」をスローガンに世界各国の人々が集い、シュリ・オロヴィンドとトルコ系フランス人のカトリック修道女、「マザー」の理念に基づき、1968年に立ち上げた。教育や労働などの日々の営みの中で自己啓発と環境保全をめざす、独自の「持続可能な」まちづくりを展開する実験都市である。アジットさんは大学を出てすぐ、1971年からオーロヴィルに住み、都市計画マスタープランづくりに始まって、住宅や学校・病院・コミュニティホールなどの公共施設の設計などを手がけ、この「新しいまち」の成長をずっと見守りつづけてきた。はじめ300人だった住民は、いまでは1800人にふえた。ボクはここに6ヶ月住んだ人はみんな「オーロヴィリアン」だと思ってるから、その意味では「市民」はもっとずっとたくさんだけどね、とアジットさんは言う。

当初この地域は、木が一本も生えていなかったという。雨が降るとすぐ地すべりを起こす、荒れはてた土地をみんなですこしずつ買い取り、雨水を直接海に流さず地下水にしよう、そしてもともとあったはずの植生を何とか取り戻そうと、貯水池を掘り、まずは成長の早い熱帯雨林の木を植えて、土壌を安定させた。30年をへて、いまは植林を、在来種へと切りかえているという。ボクが死ぬころには、かつての森林がだいぶんよみがえっているはずだよ、とアジットさんはとてもたのしそうに語った。

30歳になったとき、アジットさんはドイツに渡っている。その後10年間にわたり、ドイツでの集合住宅プロジェクトに参加。学校や病院など公共建築の共同事業にも携わった。だからドイツ語もぺらぺらである。ドイツとの付き合いは長いんだ、たくさん友だちがいるし、いい仕事をさせてもらった。でもね、なんてったってドイツにおける最大の収穫は、ウチの奥さんさ。アジットさんは、いたずらっぽく笑った。奥さんのラトナさんはドイツ人、やはり建築家である。

【タミル地区の町家】

「いやあ、よく来たね。疲れてないかい?部屋でちょっと休んでもらってもいいんだが、この時期は夕暮れがはやい。明るいうちに、まちを見たほうがいいよ。まずは、タミル地区の町家と町並

みを見にいくということで」
　アジットさんはそう言うが早いか、すたすた歩いて車に乗り込んでしまった。アシスタントのリシーさんも、あらあら着いたばっかりなのに忙しいこと、と笑いながら一緒にすたすた歩き出した。こうして私たちは、あっというまに出発した。

　ポンディシェリの南半分、フランス地区には460しか建物がないけれど、北半分のタミル地区には同じ面積に5000の町家がひしめきあっている。タミルの町家には決まった様式があり、今もそれが残る家も多いけれど、住民たちはコンクリートのモダンな住宅に憧れて、それらを壊したがる傾向にあるという。その土地に独特な、いわゆる「バナキュラーな」家は、同じように見えても全部違うんだ、そのひとつひとつの家の個性は全部揃って、はじめてひとつの町並みになる。だからボクはひとつでも建物を失いたくない。住む人にはそれがなかなか分かってもらえなくてねえ、とアジットさんは嘆息した。
「ボクは、80年代からポンディシェリの町並み保存にかかわっているけれど、きちんと調査を始めたのは90年代から。1995年にまず、ポンディシェリの建物を全部調べた。フランス極東学院との共同作業で、ひとつひとつの建物の文化財としての価値の評価をした。フランス地区もタミル地区もくまなく歩き回り、残っている建物に全部番号を振った。どこの通りにあって、だれが持っていて、何のための建物なのか。どんな様式で、何階建てで、建材はなにか。内装はどうなっているか。ひとつずつ詳しく調べた。そして、保存状況と建築的な価値の両面から格付けし、地図上の色分けをした。それをもとに、EUとの共同プロジェクトを申請して、町並み保存・修復計画に本格的にのりだしたというわけさ。フランス地区は建物の数が少ないから、一連の作業は比較的容易だった。でもタミル地区はやたらと家が多くて、一筋縄じゃいかなかった。
　当時、タミル地区に保存する価値のある町家は1507残っていた。ところが6年後の2001年には1031に、その2年後の2003年には916まで減った。なかを改修すれば快適に住める、とても保存状態のいい家が、なんのこだわりもなく壊されて、コンクリートの味気ない家に次々と建てかえられちゃうんだ。相続で家を2つ3つに分割、なんてこともおこる。このままだと、2020年には150しか残らないことになってしまうんだ。もったいない話だと思うだろ」
　アジットさんは住宅建築の専門家として、ひとが暮らす家の歴史と記憶がないがしろにされていくことに、危機感とあせりを感じているのだった。何もなかった荒地に新しい実験都市オーロヴィルを築き上げたアジットさんが、その傍らにあって、こわれやすい古い記憶を幾重にも包み込んでいるタミル地区の町並みに、ひとかたならぬ愛着を感じるのは、とても自然なことのように思えた。

「ここがバイシャル・ストリート。タミル地区の町並み保存のモデルケースとして、修景に最も成功した通りのひとつだよ」

道路から引っ込んだところに、ひとつずつ離れて建てられているフランス地区の家とちがって、タミル地区の家はすべて壁を接し、軒を連ねて表通りに並んでいる。ファサードから玄関のドアまでの空間は、二段構えのベランダになっていて、最初のベランダは「タラヴァラム」、1段上がった次のベランダは「ティンナイ」というんだとアジットさんが教えてくれた。タラヴァラムは、四角くて細い木の柱が軒を支え、その下で雨宿りできるようになっている。巡礼者が自由に泊まれるように解放しておくのが習わしだという。その奥のティンナイは、太めの円柱で支えられ、訪問客を迎える縁側みたいなところ。日本の縁台にそっくりなベンチが置かれている。タミルの人はね、なかなか家の中までは人をいれないんだ。お客さんが来ても、だいたいはここまでなんだよ、とアジットさんが言った。

タラヴァラムの軒はみんな同じ高さで、タミル様式の特徴である独特の繊細な木彫りの装飾が施してある。レースのような木彫りの軒飾りが、町並み全体を貫くように、道の両側にずらりとまっすぐに続くのは壮観だった。これを保存するのは大変だったよ、ひとつだって壊されちゃったら、軒先の連続が途切れてしまうんだからね、とアジットさんは感慨深げだった。

タミルの町家は入り口が狭い。アジットさんはひとつの古い家の入り口で靴を脱ぎ、中に入って、やあやあと挨拶した。玄関から続く細い廊下の先に居間があって、そこで主人が私たちを迎えた。どうぞ奥までごらんくださいと促され、さらに進むとその奥に台所と中庭、さらにその先に、洗濯場と井戸。そして一番奥に、坪庭のようなちいさな中庭があった。

「2階を見てきてごらん」アジットさんが言った。

「1階はさっき説明した伝統的なタミル様式だけど、2階は柱の配置や窓のつくりがコロニアル風なんだ。天井が高く、柱は円柱で、窓にもガラスがはめられている。この地区によくあるんだが、タミルとフランスの折衷様式というやつさ。この家にとっては、折衷そのものが個性なんだ。天井も窓も、ひとつひとつの造作がきめ細かくて美しい。建築的価値の高い家だよ」

家の主人に、住み心地はどうですかと聞くと、私たちはこの家がとても気に入っています、暮らすのに何の不自由もありません、いい家ですと、にこやかになめらかに、英語で答えがかえって

きた。礼を言って外に出ると、アジットさんはこころなしか顔を曇らせ、入り口を振り返って小声で言った。
「あの人はいつもああやって、いい家だいい家だと言うけれど、実のところ、ちっともあの家を可愛がっていない。家族だって、自分の家の歴史と記憶に、敬意も愛着も持っていない。窓は破れたまんま、壁も床も汚れ放題だったろ。家を粗末に扱っているんだ。ボクらは個人の持ち家であっても、改修費用を折半できるような補助金のシステムを作った。それで折りを見ては、あの家に出向いて、そろそろ改修しませんか、いつでも相談にのりますよ、と説得しているんだが、あのとおりいつもぬらりくらりとかわされてね。あんないい建物が、みすみす荒れ果てていくのを見るのは建築家として忍びないよ、ほんとうに」
　アジットさんは悲しそうに首を振った。いくら愛情を注いでも、言うことをきかず、どんどんグレていく息子を嘆く父親みたいだった。
　お茶でも飲みませんかと、私たちは道端のチャイの屋台にアジットさんを誘った。人数分のガラスのコップがカウンターにならんだ。まず手鍋で湯を沸かす。ぐらぐら煮立ったら、手早くコップに注ぎ分けて、お湯を捨てれば消毒完了。その間に、もう一つの手鍋で吹きこぼれそうになっているミルクを火からおろし、濃い紅茶の入った別の手鍋に高い位置から注ぎ入れる。ミルクは真っ白な一筋の糸になって、魔法のように紅茶の中に落ちていった。もう一度、今度はカラになった手鍋にミルク入り紅茶が飛んでいく。二度三度、紅茶は空中を行き交って、ふたつの小鍋を往復し、最後は狙いあやまたず、それぞれのコップにぴたりと均等に収まった。ミルクの甘みと紅茶の香りがえもいわれぬ、絶妙の味わい。
「これが『南』のスタイルさ。この屋台をギンザのど真ん中に持っていったら、大ヒット間違いなしだとボクは思うんだけどなあ」
すっかり元気になったアジットさんが、チャイのコップを片手にほがらかに笑った。

　もうひとつ、タミル様式の町家を見ないかとアジットさんが言った。最近7年契約で借りることにした物件で、きちんと改修して、自分が代表を務めるINTACH（インタック。インド芸術・文化遺産ナショナル・トラスト）の新しい事務所にするつもりだという。さっき見た家とほとんど同じつくりだが、人が住んでいない分、さらに荒れ果てていた。アジットさんは靴をはいたまま、細い廊下を通って中に入っていった。
「この建物はね、ファサードから玄関、居間までは、タミル様式を忠実に復元して、コミュニティセンターにしようと思う。タミルの人たちは、なかなか自分の家に他人を入れないって言ったよね。だから伝統的な町家がどんなものか、見たことがないし、想像すらできないことも多い。ひとつきちんとした改修例を公開すれば、そうか自分の家もこんな風にできるんだ、だったら改修してもいいかな、というイメージも湧くというものさ。もちろん観光客や研究者にも、タミル様式の代表的な建築の実例を見てもらえることになる。事務所には、奥の台所・洗濯スペースを当てるつもりだけど、ちょっと暑いのが悩みかな。それから、そこの階段は、もともとあったものじゃないから取っ払ってしまって、元の場所にもう一度作り直そうと思うんだ」
　私たちは、取っ払われる前の狭い階段を上がって2階に行った。2階はフランス様式で、高い天井と太い柱に囲まれた、がらんとした空間になっていた。
「いい空間だろ。ここはオーディオ設備を備えたホールにしようと思っている。映像や音楽で、この地域の文化や町並みを紹介したり、小さな展覧会や講演会をできたらいいな、と思う。日本の写真展だって、パフォーマンスだって、なんだってできるよ。まちの真ん中にあるから、きっと

たくさんの人がきてくれる」
アジットさんは、実に楽しそうに、将来のまちづくりセンター構想を語った。改修費用は全部で4万ドルくらいかかるけれど、半分はインドのナショナル・トラストが出してくれることが決まったという。残りの半分の工面に走り回っているところさ、それがないと、いわゆる「マッチング」ができないから、ナショナル・トラストも資金を出してくれなくなっちゃうからね、とアジットさんは言った。
でも賃貸でしょ、7年間の契約が終わって、すてきに変身したセンターを、家主が「やっぱり返せ」と言ったらどうするんですか。ちょっといじわるな質問をしてみた。アジットさんは、またまたほがらかに笑って、即座に言い放った。
「いいじゃないか。とにもかくにも、町家がひとつ、救えたんだから」

【グランバザール】

翌日はアシスタントのリシーさんが、グランバザール（市場）に連れて行ってくれた。リシーさんはおじいさんの代に、バングラデシュからインドに移り住んできたそうで、どことなくインドの人にない雰囲気を漂わせる、穏やかな優しい顔をした女性。トレッキングが好きだという彼女は、いまにも踊り出しそうな躍動感のある足取りで、たのしそうにまちを歩く。あたしのおじいさんはね、牛をたくさん飼ってたの、だからあたしは牛を見ると、心がすうっと平和に落ち着くのよ。そう言って、道ばたにすわりこんでいる牛のそばで、うれしそうに笑う。もともとテキスタイルの専門家で、タミル・ナドゥのちいさな村々を回っては、その土地の素材を使った手工芸品のワークショップをしていた。あるときそれが、アジットさんの目にとまり、そのままスタッフとして引き抜かれたらしい。あたしともうひとりの同僚だけが、建築家じゃないスタッフなのよ。いわゆる「パブリック・アウェアネス」っていうのかな、市民が自分から積極的に参加する形でまちづくりを広げていくには、エンジニアだけじゃない「別の眼」も必要だっていうことだったんじゃないかしら。リシーさんはちょっぴり照れくさそうに言った。

グランバザールは、生活に必要なすべてのものが揃う、巨大な市場である。この市場を活性化しつつ、都市の景観としても保存する、というのがアジットさんのまちづくりのひとつの柱。市場の入り口には、寺院にささげる花飾りの店がずらりと並び、ジャスミンなどのいい匂いのする花に埋ずもれて、女性たちが眼にもとまらぬ早さで糸で花を結びあわせていた。続いて米や豆、パスタ、粗糖などの乾物通り。マカロニだって売ってるの、米よりオシャレだって、若い人に人気なのよ、とリシーさんが言った。隣には色とりどりの野菜や果物が山と積まれ、築地のせり市みたいな威勢のいい売り声が飛び交っている。反対側は魚市場と肉の市場。その向こうは紅茶やコーヒーの量り売り。いろんな声といろんなにおいが、市場の空間に渦巻いていた。インドの人は何でも市場で買うの、スーパーマーケットはあんまり好きじゃないわ、とリシーさんが言う。
市場の中心にある時計台のあたりで、リシーさんが小さな袋を見せてくれた。これはね、あたしがワークショップをやってる村の女性たちが、いらなくなった端切れでつくったの、ちょっとしゃれているでしょう。ちいさな巾着袋は裏地も丁寧に縫い合わされて、二対の口紐がついていた。片方の対を引っ張ると閉まり、もう一方の対を引っ張ると口が開く。両手で引っ張ると開く袋と

いうのは初めて見た。すごいでしょ、この仕組み。おまけにみんな自然素材なのよ。リシーさんはわがことのように自慢した。
「村の手工業は、自律自足が原則だと思う。私の村には67歳になる、ヤシの葉っぱの敷物づくりの名人がいるんだけど、そのおじいさんはこれまで、途中まで仕上げて別の業者に卸してたのね。そうするとマージンはとられるし、いったん在庫になっちゃうから、売り上げもすぐには支払われない。1ヶ月後に100ルピー、3ヶ月後に500ルピーと、さみだれ式に払われるわけ。だからあたしは言ったのよ。ひとりで全部つくっちゃいなさいよ、そしたらあたしが売ってきてあげるって。おじいさん、はりきっていろんなデザインの敷物つくってくれてね。いまでは知り合いのブティックの人気商品になってるわ。若い人にも編み方教えて、親方として慕われている。
テキスタイルも同じ。糸紡ぎ、染め、織り、裁断、縫製、販売、みんなバラバラだと、つくった人に収入がなかなか還元されない。だからあたしは、村のひとたちが村の素材と村の技術を活用して、自然素材だけで自足的に製品を作り、それを直接、販売所に持っていって売る仕組みを勧めるの。例えばいま着ているブラウスは、南部の小さな村の製品だけど、糸からすべて、その村の中でつくったもの。すその模様はね、その土地の伝統的な刺繍をモダンにアレンジして、若い人にも人気のあるデザインをみんなで考えたの。ボタンはヤシの殻からつくってるし、染料だって全部自然のものよ。型紙は、その村の腕のいいおばあさんのものを、みんなで使ってる。
服にしても、竹細工や手漉きの紙にしても、それぞれの村に名人と呼ばれる人たちがいる。ワークショップやったりすると、そういう名人たちがまず張り切って、若い人たちと一緒になって、生き生きと作っているの。あたしはそれを大きな業者には卸さずに、チェンナイの大学のバザーや、知り合いのちいさなブティックに置いてもらう。売れた分だけ生産者にそのまま還元するわけ。インドでは、特に女性がまとまった現金収入を得ることは難しいから、とても喜ばれているわ。グランバザールで手漉きの紙のカードを売ってたら、たまたまとおりかかった外国人が『あと1000枚』と追加注文して、海外との取引成立、なんてこともあったなあ」
リシーさんは自分が関わった村のことを、目を輝かせて語った。あっちの村の72歳のおじいさんは竹細工の入れ子の籠の名人で、水ももれないくらいきっちり編めるのよ、こっちの村の80歳のおばあさんは仕立ての腕が抜群で、だれよりも早く縫い上げちゃうの。
「ヨーロッパではゼロ・エミッション、ゼロ・エミッションって騒いでいるけど、つまるところインドの自然素材の活用とコミュニティの自足経済のシステムが、その究極のありかたじゃないかと思うの。難しい統計や理論は知らないけど、住民ひとりひとりが、自分の手の届く範囲で自足して、無駄を出さずに楽しくお金を稼ぐことが大切だと思う。顔の見える経済が、未来の持続可能性の鍵を握るんだと、あたしは考えているわ」

【グリーン・ダイヤモンド】

グランバザールをあとにして、私たちはゴミ処理場「コンポスト・ヤード」へと向かった。途中、私たちの車をちいさなバイクがブーンと追い越していくので、よく見るとヘルメット姿のアジットさんがちょこんとまたがって、背筋をピンとのばし、ヒゲを風になびかせていた。
コンポスト・ヤードは郊外の海辺にあった。見渡す限りの草原に、家畜の厩舎のような細長い建物がいくつも並ぶ。その先には、どこまでも青いインド洋がはるかに広がっていた。いったいどこ

にゴミがあるんだときょろきょろしていると、先回りしたアジットさんと部下のアショクさんがやってきた。アショクさんはすらりと背が高く、銀色の髪がインドの人気俳優アミタブを思わせるハンサムな男の人である。
「2年前まで、ここはあたり一面にゴミが散乱する、おそろしく汚い場所だったんです」
　アショクさんは、浅黒くひきしまった顔におだやかな笑みを浮かべ、ゆっくりと言った。
「50エーカーの敷地全体が、見渡す限りのゴミの山で、遠くからでも悪臭が漂っているのがわかる。困ったものだと言う間にも、ゴミはどんどん捨てられて、ますますひどくなる一方でした」
　いまは草原に青い草が生い茂り、花が咲きみだれ、かつての惨状を偲ばせるものはさらにない。
「政府としても、ゴミの問題の解決は優先課題でね。どうにかしなくてはと思っていた。沿岸地帯にはゴミを放置してはいけないと、法律で定められているのに、野放図な状況でしたから。そこにわれわれが、コンポスト・ヤード、つまり生ゴミの有機処理施設の構想を持ち込んだ。政府にとっても渡りに船というやつで、即座にオーケーが出ました。土地を提供してもらい、山積みのゴミは地中深くに埋めちゃって、その上に土をかぶせ、この場所で私たちの『グリーン・ウェイスト』(生ゴミ)・プロジェクトは始まりました」

　アショクさんは私たちを最初の建物に連れて行った。屋根の下に、生ゴミがいくつも大きな山になっていて、初めてゴミのにおいがぷんと鼻をついた。
「われわれは、文化遺産は単体ではなく、周りの環境と一緒に美しく保存されなくてはいけないと考えています。文化財は都市環境マネジメントにおいても、きちんとその位置を持たなくてはいけない。たとえばさっき行ったグラン・バザールは、都市遺産としての保存計画を進めているんですが、同時に都市活性化プロジェクトの目玉でもあります。あそこからは1日に2トンから5トンの生ゴミが出る。まずはそれをきちんと分別して処理することが、このプロジェクトの狙いです。ここに積んである生ゴミは、水と牛フンを混ぜたあと、45日間ねかせます。その間、10日ごとに上下を『かえして』空気を入れ、発酵を促す。45日経ったら、そこでやってるように、大きな網で漉します。随分とさらさらになっているでしょう」
　作業をしているのは、ほとんどが地元の女性だった。数少ない安定した現金収入の機会となっているという。おそろいの緑の作業服を着て、髪も緑のスカーフで被い、ときおり楽しそうにおしゃべりしながら、てきぱきと作業をこなしていた。カメラを向けると恥ずかしそうに目をそらし、横を向いたままニコっと微笑んだ。
「網で漉したら、隣の建物の『ベッド』と呼ばれるコンクリートの箱に詰め直し、ミミズのタマゴと一緒にさらに45日寝かせます。ミミズはタマゴからかえって、上から下へと動いていきますから、15日ごとに上下を返して全体にミミズが行きわたるようにするんです」
　四角い大きな「ベッド」が立ち並ぶ前で、ミミズ係の女性がそのひとつの中身を手ですくって見せてくれた。なるほどたくさんのミミズが絡み合っている。それはもはやゴミではなく、黒い豊かな土になりつつあった。

「2004年のインド洋大津波のときは大変でした。せっかくプロジェクトが軌道に乗りかけていたのに、ミミズのタマゴが全部流されてしまいましたからね。一からやり直しでした。これだけ海に近いんだから、仕方ないといえば仕方ないことですが」

アショクさんはちょっと遠い目をした。1年前の津波の惨状と、苦労が水の泡になった落胆の瞬間を、ふと思い出したのかもしれない。ちょうど1年たったのですね、というとアショクさんはかすかな笑みを浮かべて、再び話し始めた。

「この建物が流されなかったのは不幸中の幸いでした。すこし水に浸かりましたが、たいした被害ではなかった。さあ、こちらにきて、土のできあがりをみてください。触ってみてください。あったかくて栄養たっぷりでしょう」

それは真っ黒な美しい土だった。生ゴミがこんなにきれいな土に変わるのかと、びっくりするくらい、黒くこってりした、豊かな土だった。

「5トンの生ゴミは、こうして1トンの土になる。土は1キロ、2キロ、50キロの袋詰めにされ、市場で売られます。いまではその収入で、コンポスト・ヤードの維持経費がすべてまかなえるようになりました。文字どおり、持続可能なゴミ処理システムのモデルが出来上がったわけです。ポンディシェリの中心部全体のゴミの量は1日100トンですから、こうしたコンポスト・ヤードが15から20カ所できれば、ポンディシェリのすべての生ゴミは、むだなく再利用できるという計算になる。同時にたくさんの雇用も生みだすことができます」

アショクさんは、袋詰めされた土を手にとって、見せてくれた。「グリーン・ダイヤモンド」。袋には、大きくそう書かれていた。

「グリーン・ダイヤモンドを運ぶ車は電気自動車です。一度に250キロ運べます。まちなかに電気を補充するバッテリー・ステーションがあって、そこでも女性が働いている。コンポスト・ヤードに15から20人、ゴミ分別作業に30人、バッテリーのチャージに20人。都合70人近い女性が、この事業で現金収入を得られるようになりました。月に2000ルピーくらいですが、彼女らにとっては貴重な収入です」

日本や欧米のように、ゴミ焼却場を建設しないのですか、日本では燃やして100分の1くらいにしてから埋め立てているそうですが、と聞いてみた。アショクさんはにっこり笑った。

「ドイツに行ったときも、同じ質問をされました。ゴミは、燃やしちゃったらぐっと量が減るのにと。

でもね、焼却場ひとつに、いくらかかると思いますか。10億ドルですよ、10億ドル。それだけのお金があったら、どんなにたくさんのことができることか。ちっぽけな工場ひとつにそんな莫大な費用、もったいなくて使えませんよ。だいたいインドには、ゴミの焼却場なんて必要ない。ゴミの半分は生ゴミだから、土にできる。残り半分はプラスチックだから、リサイクルできる。もちろん薬品や乾電池のような有害物質を含むゴミは、特別な処理が必要です。だから、水を汚染しないように、固めて地中に埋める『ランドフィル』計画を進めています。出してしまったゴミの体積を減らすことに汲々とするのではなく、出るゴミの量自体を減らす、ということを真剣に考えるべきなんです。ドイツでインド人の私がそうコメントしたら、先進国の誇りが傷つけられたみたいで、みなさんちょっぴり不機嫌になっちゃいましたけどね」

コンポスト・ヤードの裏手には、たくさんの花やハーブが植えられて、暖かな日差しを浴びていた。近い将来、この海岸をフラワーガーデンにして、人々が集う場所にしたいと、アショクさんは夢を語った。このプロジェクトはキミの子どもみたいなもんだからさ、これからもっと大きく育てなくっちゃ。アジットさんがアショクさんの肩をたたいて、またまた高らかに笑った。

【夜に歌う】

それにしても、津波はいろんな被害を与えたんですね。改めてアジットさんに聞いてみた。

「そうさ。このあたりは、他の地域と比べれば比較的少なかったかもしれない。でもタミル・ナドゥ州沿岸地域の4つの村でも、たくさんの人が亡くなった。船も網も流されて、家もなくなって、漁民たちは生計を立てることができなくなっちゃったんだ」

アジットさんも支援活動をしたんですか。

「ボクがすんでいるオーロヴィルは、直接津波の被害は受けなかったからね。被害を受けた近くの村での支援活動を、なるべく早く開始しようということになった。オーロヴィルは、デザイナーとか写真家とか、彫刻家とか建築家とか、『手に職を持った』住民が多いから、それぞれの技能を生かした活動をしてはどうか、ということになってね。でも実際に現地に行ってみると、事情は違っていた。被災地ではたくさんのボランティアやNGOの人たちが、家や家族を失って呆然としている人たちを取り囲んで、欲しいものはないか、してあげられることはないかと、わいわい言っている。考えてもごらんよ、愛する家族を失い、とてつもない恐怖を体験し、まだそれを事実として受け止めることすらできないときに、きれいなサリーをあげましょう、立派なお墓をたてましょう、モーター付きの船をあげましょう、なんて言われてもね。まわりが自己満足のために騒いでいるようなところがあった。

だからボクらはまず、被災者のプライバシーの確保に努めた。家族ごとに、粗末ではあっても家をつくり、家族だけの空間を持てるようにした。そして、彼らが津波という自然災害を、事実として受け入れられるようになるまで、ゆっくり待つことにした。時間が必要なんだ、こういうことには。だけどその間にも救援活動の人たちは、折角ここまで足を運んだんだから、なんでもいい、何かしてあげたい、自分にできることはないかときいてくる。だからボクは彼らに言ったんだ。『それならば、夜に歌ってください』、とね」

「被災者も、昼間はなんだかんだとすることがあって、気がまぎれている。でも夜になると、明かりはないし、すべての音は消えて、まっくらに静まりかえった闇の中に、海の波の音だけが響

いてくる。彼らが最もさびしくなり、取り残された悲しみと将来への不安をひしひしと感じるのは、夜なんだ。だから、音のなくなる夜に、ひとの歌声が響いてほしかった。ひとの声を聞くことで慰められ、孤独じゃないんだと思ってほしかった。みんな、分かってくれたよ」

【ツナミカ：津波の子】

「この人形を知ってるかい」
　アジットさんが、ちいさな人形を見せてくれた。布でできた、4センチくらいのてるてる坊主のような女の子の人形で、背中に安全ピンがついている。
「これは、『ツナミカ』っていうんだ。ボクの知り合いのデザイナーが考えたもので、いまではその運動は国際的に拡がっている。彼女はウーマさんといって、オーロヴィルで服飾工場をやっている。津波でたくさんの人が被災するのを目の当たりにして、彼女はデザインを学んだ者として、何かできることがないかと一生懸命考えた。そして、だれにでもできる簡単な人形を被災地の女性につくってもらい、それを配って寄付を募ることを思いついたんだ」
　日本にも赤い羽根募金があります、いくらでもいいんだけどお金を寄付をすると、ひとつ、赤い羽根がもらえるんです、というと、アジットさんはそうそう、同じアイデアさ、と言った。
「タミル・ナドゥ州では、沿岸の4つの漁村が大きな被害を受けた。家も船もなくし、呆然自失で毎日を過ごしている人々は、援助を受けるばかりで自分たちでは何もできないことに、日増しに絶望感と焦燥感を募らせていた。だれからも求められていない、という状況はつらいものだよね。ウーマさんはそういう村のひとつに出かけていって、自分と一緒にちいさな人形をつくりませんか、それをつくることでお金を稼ぎましょう、つくり方を教えますから、明日9時に希望者はここで待っててください、材料はいりません、端切れを持っていきますからそれを使いましょう、と言って回った。
　せいぜい10人くらいかなと思っていたら、翌朝、約束した場所に、なんと65人の女性がずらっとならんでウーマさんを待っていた。そのうち半分は、針に糸を通したことすらないような人だったらしい。ウーマさんは4日間かけて、人形づくりのワークショップをした。最初はおっかなびっくりだった女性も、だんだん針が使えるようになって、4日目にはそれなりの人形が出来るようになっていった。針仕事を覚えたことも大切だけれど、なによりもすばらしいのは、3日目くらいか

ら女性たちに笑顔が戻ってきたことさ。できあがった人形の顔を互いに見せあって、あらヘンな顔ねえ、あたしのほうがよっぽど上手だわ、とか、なんだかそれ、あんたに似てるんじゃない、なんて冗談を言い合って、表情にみるみる明るさと希望が戻ってきたんだ。

ウーマさんは4つの村を次々と回って、毎日ワークショップを続けた。どこへ行っても、ひっぱりだこだったそうだよ。この1年で、500人近い女性がツナミカの人形づくりを覚え、そのうち100人以上が指導者としてそれを教えられるまでになった。彼女らはツナミカをつくることで、現金収入も得られるようになった。コミュニティにも個人として参加できるようになった。その地域は、もともとはとても封建的で、女性の地位の低い漁村だったんだけど、いまでは先進的な活動を、女性が担っている。ウーマさんは言ってるよ。『インドは50年前に独立したけれど、タミル・ナドゥの女性は津波のあとに独立した』ってね」

あらためてツナミカを眺めた。ちいさな草の種がくるまれた丸い頭、糸でぐるぐる巻きにした首。ふわっとひろがったスカート。どことなく日本のこけしを思わせる、ちょっぴり醒めた顔つき。ごく簡単なつくりだが、そのままブローチにも髪飾りにも、本のしおりにもなる。

「ツナミカは、それまでは捨てられていた端切れから生まれた。ゴミだったものが、自分は必要とされているんだ、という心の支えに生まれ変わったんだ。『ツナミカ』というのは、津波の子、くらいの意味で使われているけれど、もともと『アナミカ』、つまり名前のない子、という響きから発想されたものなんだ。名もない人たちが生み出した、大切な心が、ゴミを宝にかえたといってもいいんじゃないかな」

【旅のおわりに】

「ずいぶんいろんなものを見たね」

帰り道、アジットさんが言った。

「ポンディシェリはちいさなまちさ。どこにでも歩いていけるし、車なら、どこへ行くにも5分とかからない。これといった名所もないし、有名な特産物があるわけでもない。

でもね、生きているまちって、そんなものじゃないだろうか。そのまちに生きた人たちが残した足跡、いまを生きる人たちの毎日の営み、その人たちが次の世代に残していくもの。まちなみも、まちの明かりも、海も公園も市場も、匂いも音も記憶もそのままに、環境（Milieu）がまるごと（ensemble）『まち』になる。こんなわくわくすることは、ほかにないよ」（おわり）

2006年1月、記す

高須 奈緒美

（追記）

このエッセイ（というにはあまりにも長い文章ですが）は、2005年12月に、私が当時担当していた「インド・ブータンまちづくり専門家交流プロジェクト」の一環で、作家の森まゆみさんや石見銀山の松場登美さんらと一緒に、ポンディシェリを訪れたときの記録です。アジットさんという魅力あふれる「まちづくりスト」に出会い、その誠実で地道な活動に接し、感動し、自分の大切な記憶として残しておきたくて、筆の赴くままにしたためました。拙い文章で読みづらいところも多いかと思います。こうして掲載していただけることになったことを感謝しています。最後まで読んでくださって、ありがとうございました。

文中の「ツナミカ」運動を展開しているUPASANAは、このたびの東日本大震災に際しても、いち早く行動を起こし、10万個のツナミカの被災地への寄贈を決めました。ウーマさんは相変わらず元気に活躍中です（詳細は以下のとおりです）。ツナミカの心が被災地のみなさんにも届くことを願ってやみません。

Greetings from India,

We are sending Tsunamika with our love and prayers to the people of Japan.

Tsunamika
A living symbol

She has been hand-made by women,
The women who live by the ocean,
The women whose lives changed forever after the tsunami,
The women who are exploring a new way of living,
The women who are empowering themselves.

Tsunamika is a project initiated in the coastal villages of Tamil Nadu as a response to the devastation caused by the tsunami of 2004 in India. Citizens of Auroville, an international township based on the teachings of the Mother and Sri Aurobindo, moved into action to give aid to local people.

Tsunamika project emerged to help traumatized fisher women by offering them the opportunity to overcome their grief through creative handicraft work. Tsunamika, thus, became an inspiration in the face of disaster. She assumed a life of her own, and seven years later, with over five million hand-made dolls, today her message of love in the face of disaster is still vibrant.

Tsunamika was launched as an experiment in gift economy. She was never sold but was shared unconditionally with whoever came in contact with her. This brought a powerful potency to her message of hope and love! For more detail write to tsunamika@upasana.in.

Upasana design studio, which created Tsunamika was founded in 1997 by Uma Haimavati in Auroville, Tamil Nadu, India, (www.upasana.in), a studio designed for people to discover themselves through creativity and exploration. Upasana's field of work started with design and garment manufacturing using a rich palette of Indian textiles.

As a natural response to the tsunami devastation in 2004, Upasana ventured/expanded into the field of social development with a strong focus on how to apply design for social welfare. Ever since, Upasana has initiated various projects exploring the potential of **socially responsible design.**

Upasana has pledged to send 100,000 Tsunamika dolls with our love and preayer to the people of Japan. With the timely support of Peace Boat and their valuable collaboration we are sending 45,000 tsunamika dolls to Japan.

Peace Boat is a ship that travels the world on peace voyages. As a neutral space beyond borders, it is a floating peace village; encouraging a sense of community and enabling direct dialogue between those onboard and in the ports that they visit; living their philosophy that any problem faced by any community is a global challenge that must be tackled through cooperation between people, organizations and governments of the world.

A project of

UPASANA

Auroshilpam, Auroville - 605101. +91-413-2622939, 2622957
www.upasana.in | www.auroville.org.in
www.tsunamika.org

Supported by

PEACE BOAT
www.peaceboat.org